

令和6年秋季俳句講座「私と季語」(5) 第2回

# 節供と花・草木

小川 直之

民俗学

國學院大學名誉教授・大学院客員教授

柳田國男記念伊那民俗学研究所長

# 自然暦の伝承<季語の基盤文化>

草木や鳥、山の雪形など、自然の姿の変化を基準にする。農山漁村で伝承されている。自然変化への感性を示す。

- 田打桜 秋田県鹿角市 コブシの花をこう呼び、この花が咲くと水田を耕し始める。
- 種蒔き桜 宮城県栗原市 こう呼ぶ桜が咲くと稲の種蒔き。
- 駒形山の白馬 秋田県と岩手県境の駒形山の雪解けが白馬の姿になったら稲の種蒔きを行う。
- 藤の花が咲き始めたら稗の種蒔きをする 栃木県塩谷郡
- 小豆の種まきは7月の合歡木の花が咲くのを目途に。長野県天龍村
- カッコウが鳴き始めたら大豆の種を蒔く 鳥取県東伯郡
- ツクツクボウシ(蝉)が鳴きだしたら柿が食える 和歌山県
- 麦があからむ頃に鰹が来る 和歌山県古座
- 南東の風が吹く(春分前)と鰯がとれる 鹿児島県大隅地方

# 節供の花・草木に籠められた意味

## 1、「節供」と「節句」

『かげろふ日記』 三月三日、せくなど物したるを

『枕草子』 十五日、せくまゐりすゑ、かゆの木ひきかくして

『宇津保物語』 五月五日になりて、せくなど、いとけうらに調じて

(七月七日)その日ノせく、川原にまゐれり

三月三日のせくなむど、かばかり仕うまつれり

『今昔物語集』(巻第十九第三十三話)

正月の朔比にて、梅の花、糸おもしろく栄き、鶯糸花やかに世の中

に今めかしく所々に節供参り、世挙て微妙き事、員不知ず

『壺囊鈔』(室町時代中期の1445あるいは1446年)

五節供ト云ハ何々ゾ、弁ニ其由来如何五節供ノ事異説多歟

『世間胸算用』(元禄5年1692刊) 惣じて五節句の取やり

○「節供」(=せちく、せく)という用語は平安時代中期から  
特定の日(3月3日、5月5日、7月7日など)の供物  
=多くは食べ物

『宇津保物語』『源氏物語』『枕草子』『今昔物語集』など

○室町時代に「五節供」という表現が出てくる。

(1/1、3/3、5/5、7/7、9/9)

意味の変化 特定の日行事全体を意味する

○江戸時代 17世紀半ば

文献記録では「節供」「節句」が混在、のち「節句」

## 2、五節供とは

○一般的には、江戸幕府が定めた祝祭日：「御禮日」(徳川家の家臣、各地の大名が江戸城に登城して祝儀の式典が行われる)に含まれている五つの節供をいう。

元和元年(1615)に制定。

○具体的には

人日節供(1月7日)	七草	2024年新暦では2月16日
上巳節供(3月3日)	桃	新暦では4月11日
端午節供(5月5日)	ショウブ・ヨモギ	新暦では6月7日
七夕節供(7月7日)	合歡木・カジ	新暦では8月10日
重陽節供(9月9日)	菊	新暦では10月11日

江戸幕府の祝祭日には、他に歳首、嘉定(かじょう)(6月16日)、八朔(はっさく)(8月1日)、玄猪(げんちょ)(10月10日)と、歳暮があった。

○「五節供」は、室町時代(1338～1573)に成立。

1月1日、3月3日、5月5日、7月7日、9月9日

後に、江戸時代に元日は歳首の式日とし、1月は7日にした。

# 人日の節供-若菜の力

○中国から伝来した考え方で、正月1日に鶏を占い、2日には狗を占い、3日には羊を占い、4日には猪を占い、5日には牛を占い、6日には馬を占い、7日には人を占うとあることによったという。「占う」というのは、これらを殺さずに大事にするということで、「人日」は罪人の処刑を行わない日。

○中国の楚国の歳事記『荆楚歳時記』(6世紀)には、この日には鬼鳥が各家を訪れるので、戸や床を叩いて鬼鳥を追い払うことを行うとある。

○日本では奈良時代には1月に「子の日の若菜摘み」が行われ、若菜の羹(あつもの)を食べた。

## 1月7日 七草粥・七日正月



1月6日の晩に七草を叩く。このときに七草囃子といって、「七草なずな とうどの鳥が渡らぬうちに バタクサバタクサ」と唱える。写真は神奈川県平塚市。この日に鬼鳥が訪れるので、床や戸を叩くことが『荆楚歳時記』にも見られる。新年の春先に床や戸を叩くことは、寺院行事の修正会などにも見られ、悪霊退散の呪法と考えられる。このことが祓えに通じる。 ➡ **若菜の粥とともに祓えの行事**

## ○若菜の七草

芹（セリ） 薺（なずな） ゴギョウ ハコベラ 仏座（ほとけのざ）  
スズナ（かぶ） 蘿蔔（すずしろ・大根）

この7種を餅とともにかゆ（七草粥）に炊いて食べると万病を防ぐといわれた。延喜年間（10世紀頃）から朝廷で儀式化し、それが民間でも今日まで伝えられてきた。

○民間伝承では、叩いた七草の汁を爪につけて、新年最初の爪切り。  
こうすると爪の病にかからない。

## ○七草の囃歌

14世紀末または15世紀の『桐火桶』には、6日の夜から7日の朝まで、七草を叩きながらこれを歌うとある。

「七草ナズナ トウドの鳥が渡らぬうちにバタクサ バタクサ・・・」



# 上巳節供<雛祭り・桃の節供>-桃の力

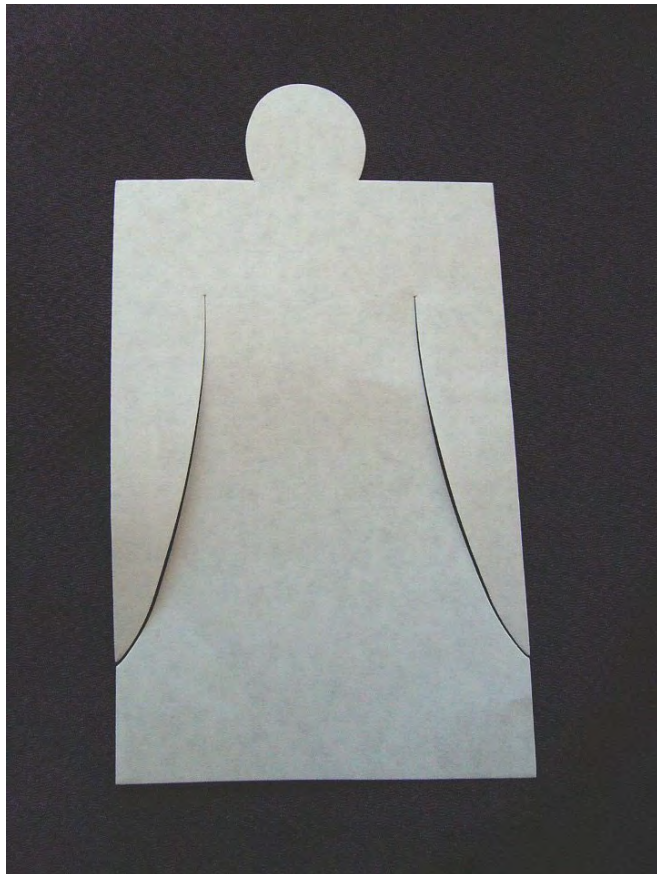


上：静岡県稲取町の雛人形と吊るし雛  
長野県北佐久郡北相木村 カナンバレ  
右：浜節供（浜下り）徳島県牟岐町



## ○『源氏物語』の上巳の節供

「須磨巻」に「弥生の朔日に出て来たる巳の日、今日なむ、かく思ふことある人は、禊したまふと、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらゆかして出でたまふ」として、陰陽師を呼んで海辺で「人形」(ひとがた)を流す儀礼を行っている。



「形代」としての「人形」が現在のよう  
な雛人形に近くなるの1400年代半ば  
平安朝の公家が子どもの形代とした  
「天児」「這子」と合体して、上巳の人  
形が飾り人形に変化した。



「人形」による祓え  
桃の花による邪気祓い  
(桃の呪力)



『絵本西川東童』○ひいなまつり 紙びなや蠟燭店のかけ看板  
志仙 京の人 江戸に来り本町辺にあそぶ

# 『東都歳事記』の雛市

2月27日

今日より3月2日まで雛人形、同調度の市立つ(街上に仮屋を補理<しつら>ひ、雛人形・諸器物にいたるまで金玉を鏤<ちりば>め造りて商ふ。これを求むる人、昼夜大路に満てり。中にも十軒店を繁花の第一とす。内裏雛は寛政<1789~1801>の頃、江戸の人形師原舟月といふ者一般の製を工夫し、名づけて古今ひひなといふ。これより以来世に行はれて、大かたこの製作にならへり)。

十軒店本町、尾張町、人形町、浅草茅町、池ノ端仲町、牛込神楽坂上、麴町三丁目、芝神明前。



# 『東都歳事記』の上巳節供

• 3月3日

- 上巳御祝儀、諸侯御登城。良賤、佳節を祝す（艾餅、桃花酒、白酒、炒豆等をもつて時食とす）
- 女子雛遊び（2月の末より屋中に段をかまへて飾るなり。当歳の女子ある家には初の節句とて分けて祝ふ）。
- 今日目黒祐天寺において雛人形を飾る事あり。
- 汐干（当月より4月に至る。そのうち3月3日を節くほどよしとす。南風烈しければ汐乾くしほひ兼ねるなり。芝浦、高輪、品川沖、佃島沖、深川洲崎。中川の沖（早旦より船に乗じてはるかかの沖に至る。卯の刻午前6時頃過ぎより引き始めて、午の半刻正午頃には海底陸地と変ず。ここにおりたちて蠣蛤を拾ひ、砂中のひらめをふみ、引き残りたる浅汐に小魚を得て宴を催せり。

# 雛菓子 山形県鶴岡市



# 端午節供-ショウブとヨモギの力

- 「端午節」は日本では「端午の節供」「五月節供」と呼ばれ、現在は沖縄県を除いて全国的に太陽暦の5月5日に行われ、1948年に「こどもの日」として「国民の祝日」に制定されている。
- 「端午節」の文献上の初出は758年（『続日本紀』）  
日本の歴史からいえば奈良時代から「端午節」が朝廷で行われた。  
これが900年代の後半に「端午節供」と呼ばれるようになった。「節供」という用語は「節」をもとにして、日本で案出された。

## ①悪疫を除く行事

- 菖蒲と蓬を屋根に挿す。あるいは家に飾る。
- 菖蒲湯に入る。
- 粽など葉で包んだ食べ物を作ったり、買ったりして食べる。  
(五毒の考え方は日本には伝来していない)

## ②男児の無事な成長を祈願する。

- とくに生れて初めての端午節供を「初節供」と呼び、こうした子どものいる家では親戚などを呼んで祝う。
- 鯉幟や武者幟(関羽、鍾馗などの図柄)を飾る。
  - 兜など武者飾りや武者人形を飾る。
  - 大きな紙鳶(凧)をあげる。

## ③競漕や紙鳶合戦という競技としての行事がある。

●現在の端午節供は②が中心となっており、中国から伝わった行事が日本で独自の展開をした。





端午節供の鯉幟(神奈川県)



武者飾りと菖蒲・蓬  
愛知県新城市須長・夏目家



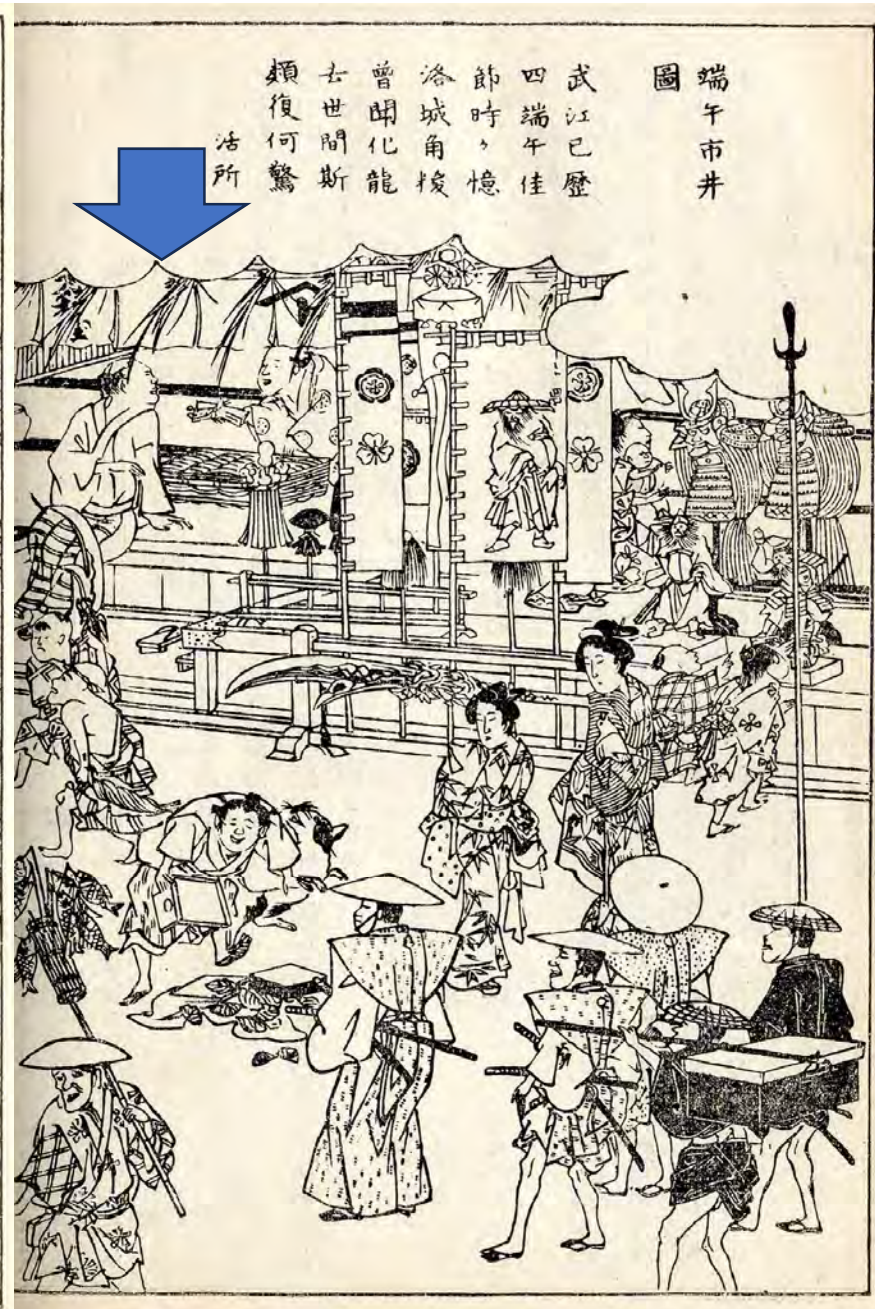
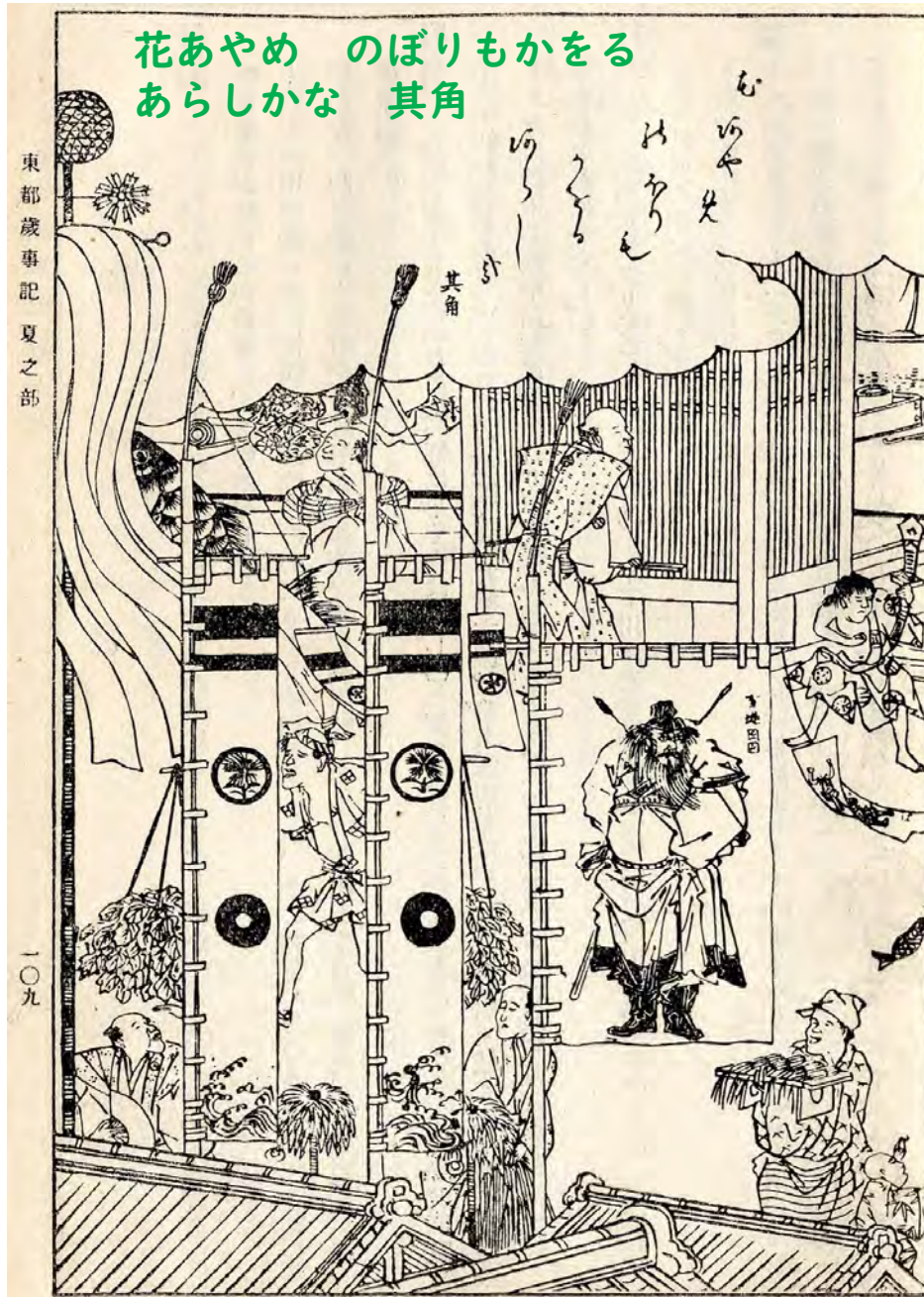




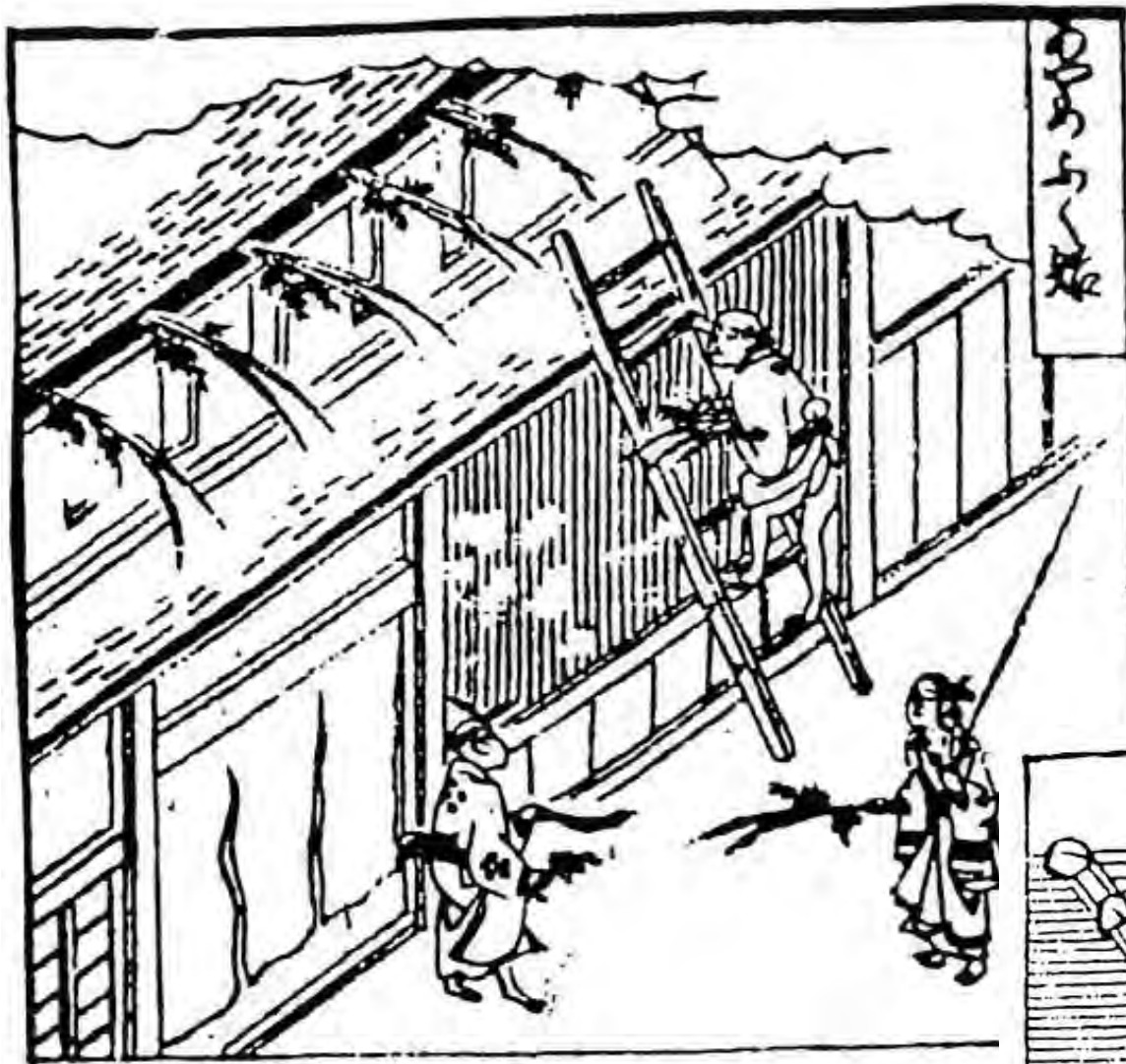
菖蒲屋根（家の入口に菖蒲・蓬を挿す）



# 『東都歳事記』(19世紀初)の江戸(東京)の端午市井図

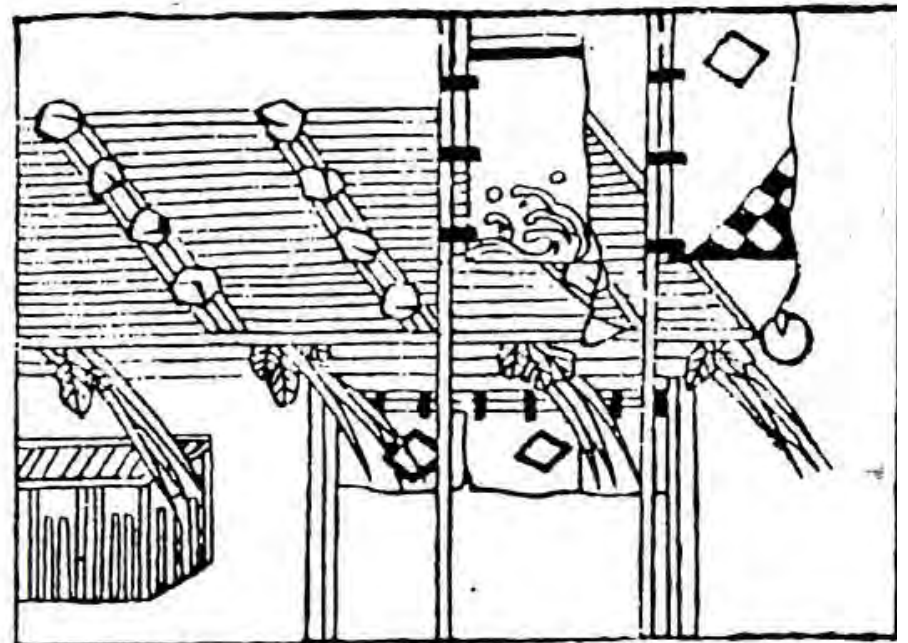






菖蒲葺

屋根の庇にショウブ・  
ヨモギを指す

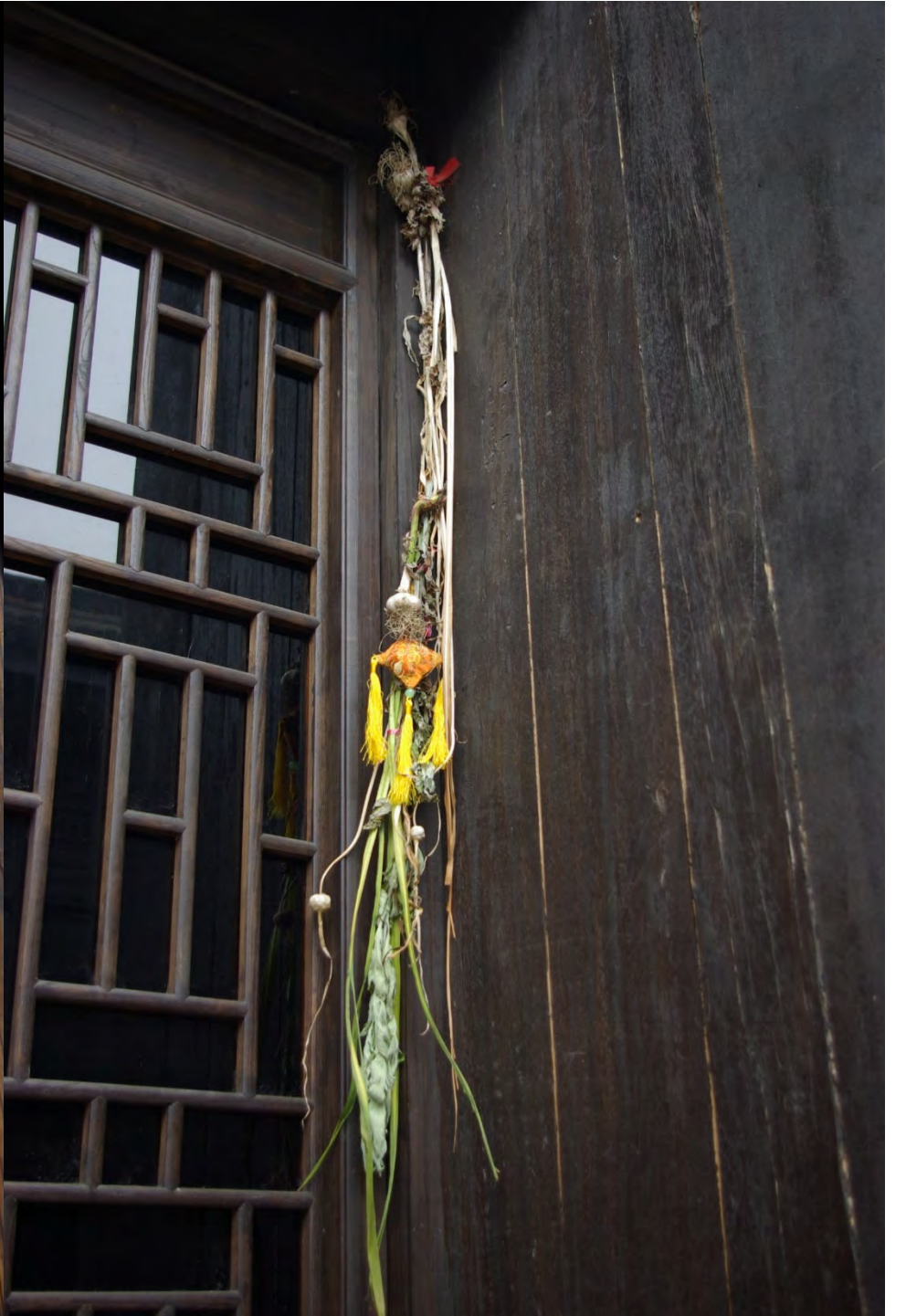






中国浙江省嘉興市





# 菖蒲湯・菖蒲鉢卷





# 薬玉と百草(艾)

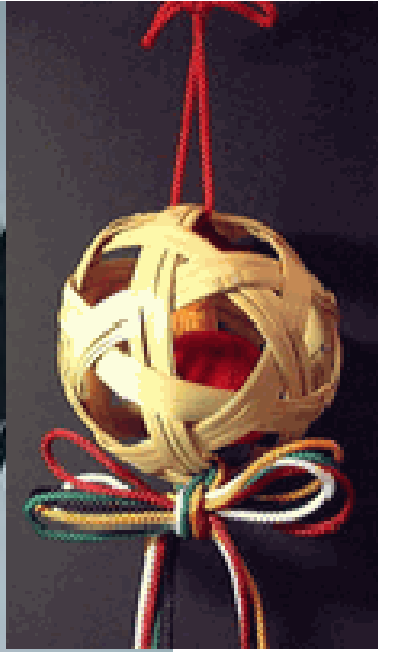
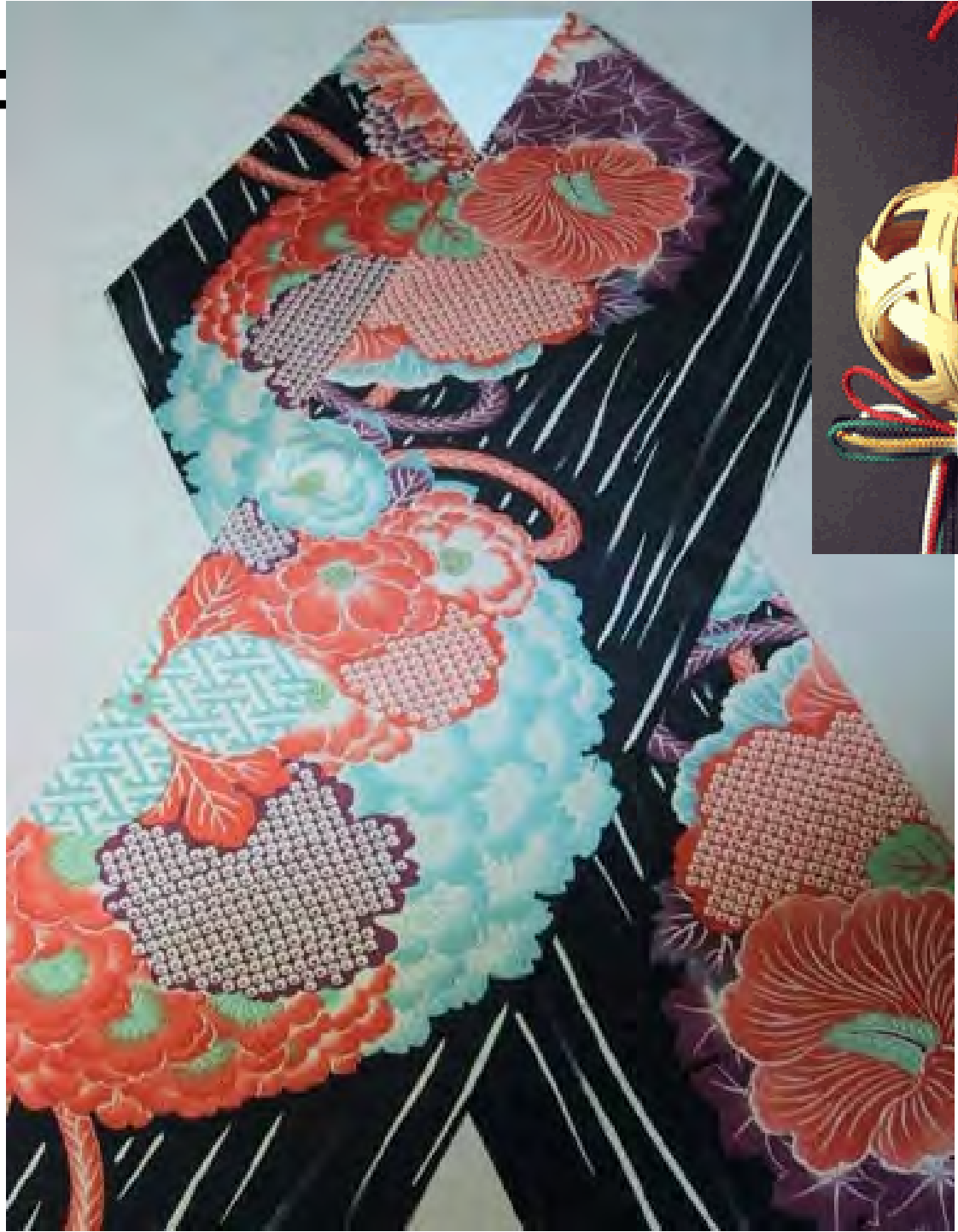
## ●端午節供に悪疫を避けること

- ・平安時代(794~1192)には「薬玉」「続命縷」を飾る習俗があった。
  - ・これは邪気や悪疫を避け、長寿を願うこと。
  - ・薬玉は『万葉集』にも詠われている。
- ※これらは現在の嘉興などの端午の「香囊」に通じるもの。

## ●端午に薬を求めること

- ・『日本書紀』の611年5月5日に「薬獵」がある。
  - ・『万葉集』にも5月5日の「薬狩」がある。
- 「薬獵」「薬狩」の記録からは、5月5日に邪気や悪疫を避ける行事を行うというのは、「端午節」という名前以前に日本に伝わっていたと考えられる。

18・19世紀には、5月5日は百草(艾)を作る日となっていた。



## 端午節供と菖蒲・蓬

- ・屋根に菖蒲・蓬を挿すことは、1000年頃の随筆『枕草子』に公家から庶民まで行っているとある。
  - ・1532年の『塵添壺囊抄』には、毒虫が人家に入るのを防ぐためとある。
  - ・菖蒲湯に入る。菖蒲を頭に巻くと頭痛が治る。菖蒲を枕の中に入れて寝る。菖蒲を布団の下に敷いて寝る。
  - ・菖蒲を頭に巻くこと(纒)は、8世紀末の歌集『万葉集』にも詠われている。
- 700年代後半には端午の菖蒲習俗が日本にも伝わっていた。

# 菖蒲から武者飾りへ

## ● 菖蒲で武者飾り(菖蒲兜)を作って飾ること

- ・13世紀中頃には「菖蒲兜」の記載がある。
- ・『荊楚歳時記』の端午の「艾人」(がいじん)の影響も考えられるが、「菖蒲兜」は、武家社会のなかで、菖蒲(しょうぶ)を尚武(しょうぶ)と、その音から読み替えた。

## ● 武者飾り

- ・武家社会の「尚武」の思想に基づく。

## ● 鯉幟

18世紀中頃あるいは19世紀初めから端午に飾るようになった。これは「登竜門」を昇った鯉は龍になるという中国の伝説に基づく。

→ 菖蒲兜・武者飾り・鯉幟は、武家社会で成立。

「菖蒲」を「尚武」と再解釈して行われるようになった。



日本の粽





端午節供の柏餅・柴餅・葦団子



# 七夕-合歡木とカジの葉



左:佐賀駅 那覇空港 右:渋谷ハチ公前





神奈川県平塚市の七夕





左:神奈川県秦野市 稲の虫除け 右:福岡県八女市星野村 この下に供物





神奈川県大磯町西小磯の七夕  
子どもたちが竹飾りを振って祓えをする





岐阜の七歳七夕



岐阜の初七夕  
(七歳七夕)

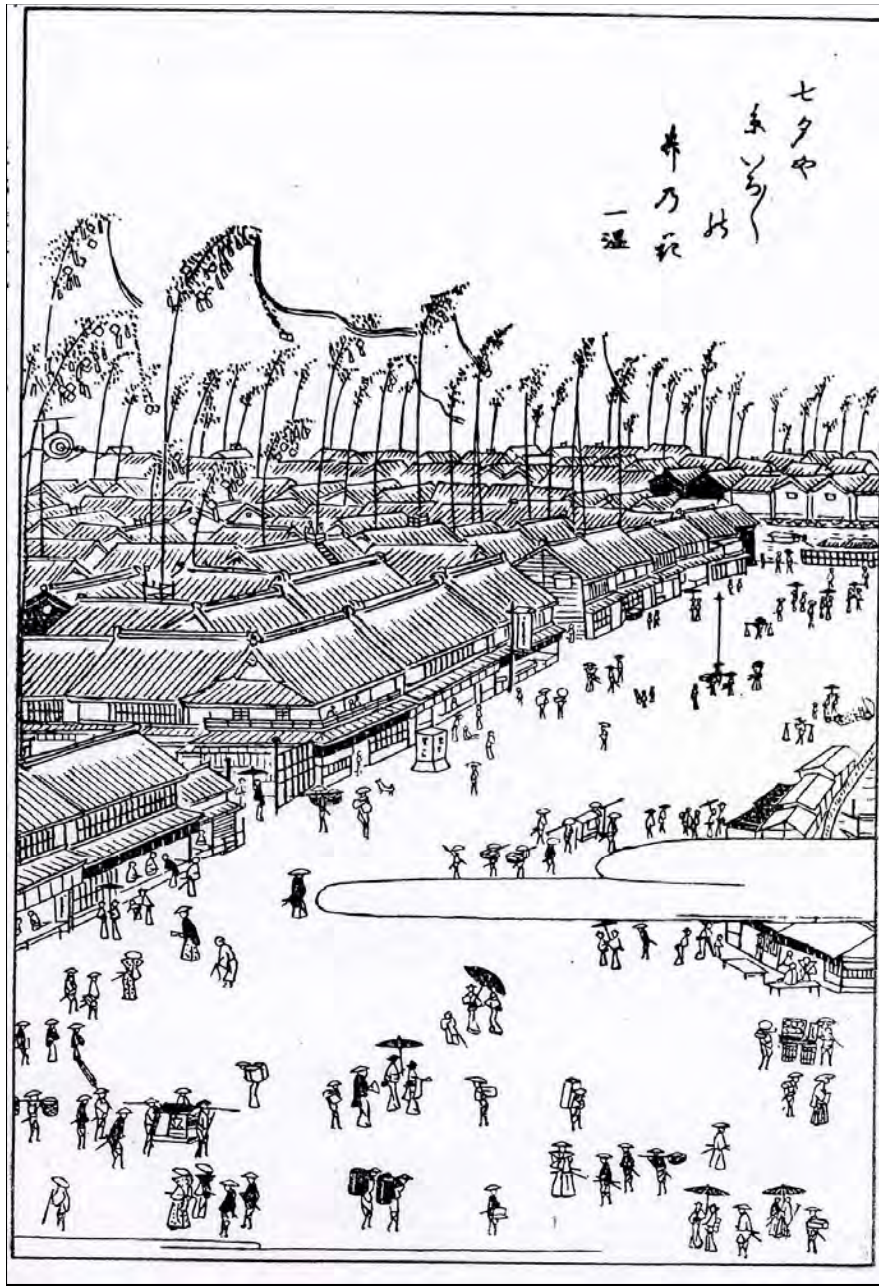






上:長野県松本市 七夕人形  
右:菅江真澄が描いた七夕人形  
(「伊那の中路」『菅江真澄民俗図絵』  
岩崎美術社・1989より)





『東都歳事記』の七夕  
七夕や糸いろいろの竹の花 一温



絵本西川東童・「織姫は婆々か娘か梶の露」



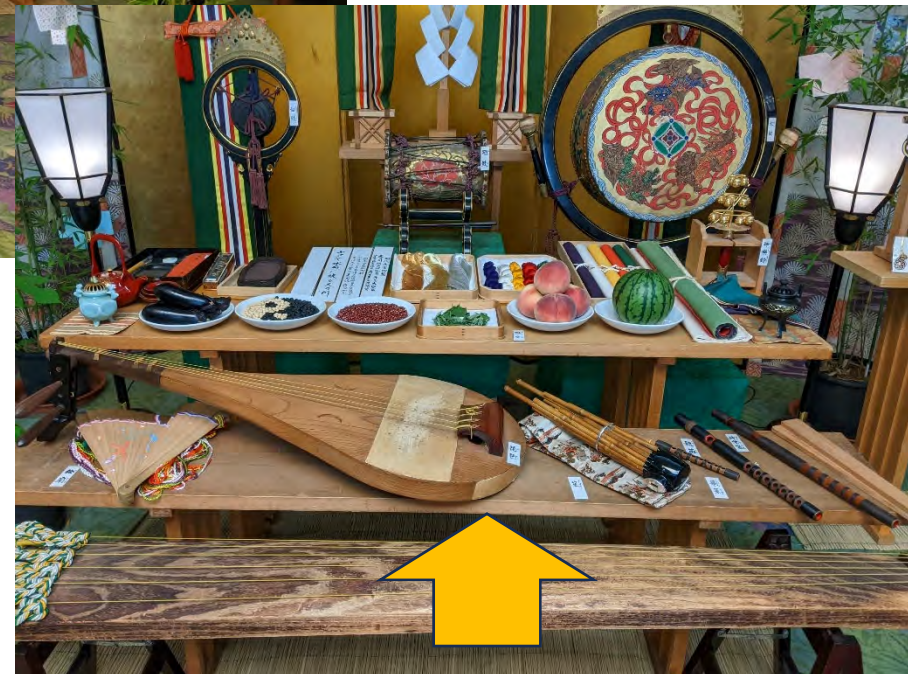


# 乞巧奠と カジの葉

梶の葉を朗詠集の  
葉かな 蕪村  
朗詠集=七夕歌会  
手をとつてかゝする  
梶の広葉かな  
高浜虚子  
かゝする=七夕歌・願文

乞巧奠(きっこうでん・きこうでん)  
東京都杉並区 大宮八幡宮

カジの葉をつり、瓜類や楽器を供える



## •「万葉集」に七夕の歌が132首

奈良朝には二星相会譚がよく知られていた。

「織女」(たなばたつめ＝棚機女)

「七夕」(たなばた)の読みは「棚機」に由来する

天の川 楫の音聞こゆ 彦星と織女と今夜逢ふらしも

(柿本人麻呂)

我が背子に うら恋ひ居れば天の川 夜舟漕ぐなる楫の音聞こゆ

(柿本人麻呂)

平安時代には七夕との結びつきはないが、船の楫(舵)が掛詞として「梶」と詠まれる

### 『平家物語』巻第1

秋の初風吹きぬれば、星合の空をながめつつ、天のとわたる梶の葉に、思ふ事書く比なれや。

楫(舵) → 梶(カジ)への転換



# 七夕と合歡木(ネムノキ)



青森県の七夕行事「ねぶた」「ねぶた」の名称は、「眠り流し」に由来する。七夕にネムノキの枝を川に流して「眠む気」を祓うのが目的



合歡の木の葉越しも厭へ星の影 芭蕉

## 『看聞日記』の「清水風情」

永享9年(1437)7月19日条

内裏御燈炉二申出拝見。一ハ詩心。一清水風情。  
牛若丸弁慶切合風情也。殊勝一段驚目了。

### ★「盆の風流燈籠」

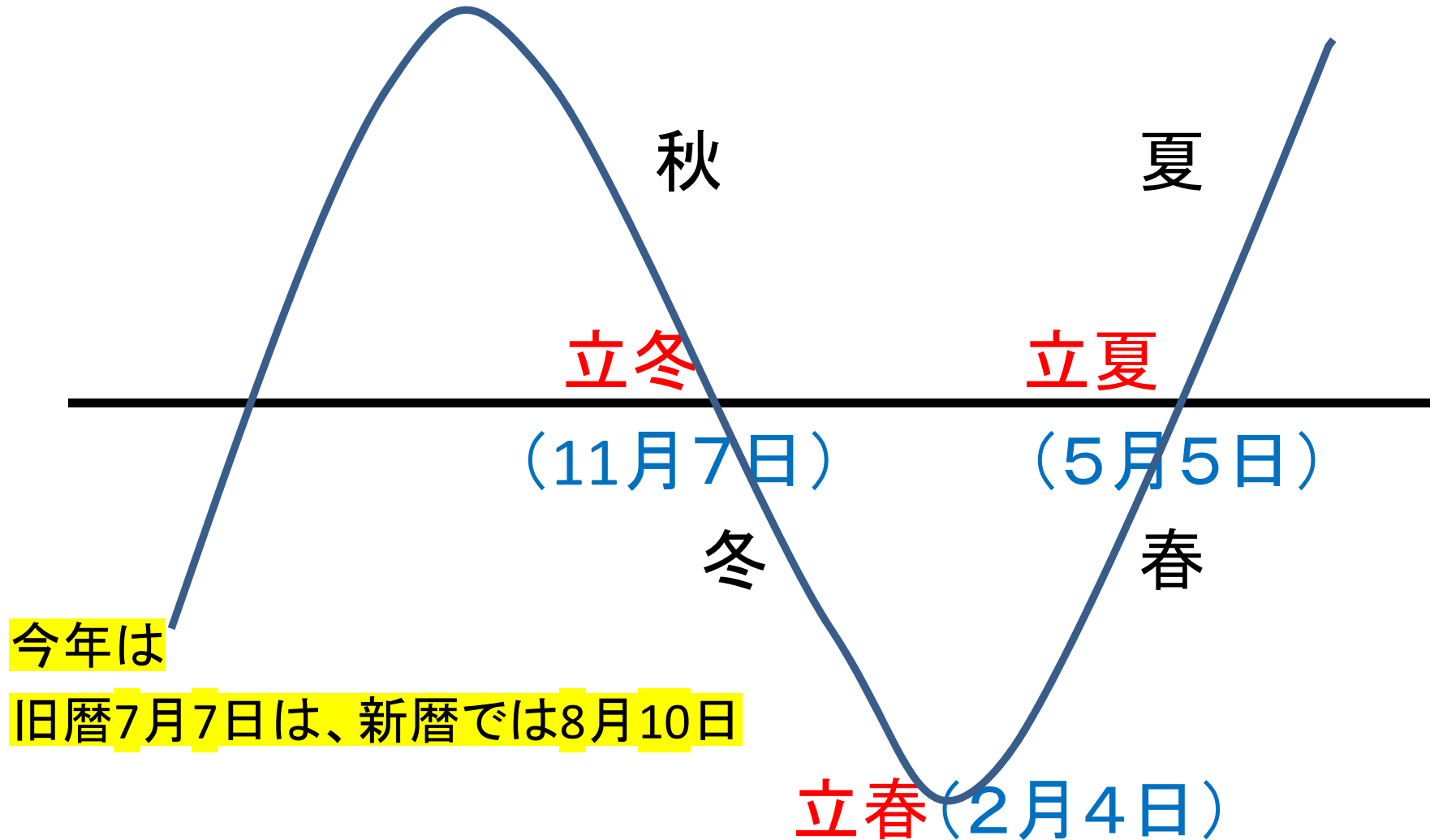
内裏に牛若丸・弁慶の清水寺での斬り合いの風情が「燈炉」として造られて奉獻され、これを見物に出かけた記事。

盆の風流燈籠は、その後、京都から近江・若狭へと拡がり、日本海沿いに能代・秋田、津軽、南部、松前へと展開する。

これらのうち、能代では「眠りながし」、秋田でも「眠りながし」(竿灯)、津軽や南部では「ねぶた」「ねぷた」となり、松前では「箱行灯」となって七夕行事となる。

# 季節<四季>の区分

立秋(8月7日)<二十四節気=太陽の運行、15日単位>





# 重陽節供-菊花の力



徳島県牟岐町の重陽(菊節供) 野菊と栗を供える





## 旧暦重陽(9月9日)の季節感

九月朔日 今日より八日まで、諸人袷衣を着す。

九日 重陽御祝儀諸侯〔花色小袖〕御登城。良賤佳節を祝す。菊花酒を以て節物とす。  
良賤今日より綿入衣を着す。



天保9年『東都歳事記』の菊の花見 染井 看菊

菊さいてけふまでの世話わすれけり 素園



## 着せ綿と菊水

『紫式部日記』(寛弘五年<一〇〇八>)~七年)  
九日、菊の綿を、兵部のおもとの持て来て、  
「これ、殿の上の、とりわきて。『いとよう  
老のごひ捨てたまへ』と、のたまはせつる。」  
とあれば「菊の露わかゆばかりに袖ふれ  
て花のあるじに千代はゆづらむ」  
とて、返したてまつらむとするほどに、「あなたに帰りわたらせたまひぬ。」  
とあれば、用なさにとどめつ。



九日に兵部の君が菊の着せ綿を持ってきて、「これを殿の北の方が特別に、『いとよく老いをぬぐい捨てなさい』とおっしゃってくださいました」というので、返礼に歌を詠んでいる。返礼に詠んだ歌は、私はこの菊の露でほんのちょっと若返る程度に袖を触れるだけにとどめ、花の主であるあなたさまにこの露がもたらす千代の命はお譲りしましょう、という内容である。

重陽節供の前の晩に菊の花の上のにのせて、菊花の香りが移り、朝露でしっとり濡れた綿で「いとよう老のごひ捨てたまへ」と言っているのであり、歌からは菊の露で「わかゆ」ことができ、千代の齡が授かると考えられていたのがわかる。

## 菊花と菊水

菊花が不老延命の効力をもつことは、中国ではすでに後漢時代の文献に見え、また後漢末の『風俗通』には、南陽酈県(れきけん・河南省)の甘谷では水源が菊に掩われ、流れ出る水に菊の滋液が混じっているのです、これを飲む谷中の人たちは、上は120, 130歳、普通でも100余歳は生き、7、80歳で亡くなるのは若死にであるという、菊滋水の話がある。

この菊滋水の話は、日本では謡曲の「菊滋童」、「枕滋童」などを構成する一部となっている。「滋童説話」と称されている説話で、穆王説話の延長線上に酈県の菊の故事が加わって成立した。酈県菊水の話は11世紀初めの『和漢朗詠集』にも見え、菊の滋水が延命・長寿をもたらすことは、この時代(11世紀初め)には知られていた。

文献上で菊の滋水の話が知られるようになるのは、菊の着せ綿の習俗が記される時代とほぼ同時期で、菊の着せ綿習俗は、菊の延命・長寿の故事と朝露呪力が重なって生成された。

日本酒などの銘柄には「菊」の名をもつものが多い。

菊正宗、菊水、菊姫、菊盛、菊乃井、千代菊、旭菊、菊の露……はこの物語と呪術にちなんだ名である。



## 『枕草子』 三七

節は五月にしく月はなし。菖蒲・蓬などのかをりあひたる、いみじうをか  
し。九重の御殿の上をはじめて、いひしらぬ民のすみかまで、いかに  
わがもとにしげく葺かんと葺きわたる、なほいとめづらし。いつかは、こ  
とをりにさはしたりし。

空のけしき、くもりわたりたるに、中宮などには、縫殿より御薬玉とて、  
色々の糸を組み下げて参らせたれば、御帳たてたる母屋のはしらに、  
左右につけたり。九月九日の菊を、あやしき生絹のきぬにつゝみてま  
ゐらせたるを、おなじはしらにゆひつけて月頃ある薬玉にときかへて  
ぞ棄つめる。また、薬玉は、菊のをりまであるべきにやあらん。されど、  
それはみな糸をひきとりて、ものゆひなどしてしばしもなし。

## 節供と花・草木

人日節供(1月7日)	七草	2024年新暦では2月16日
上巳節供(3月3日)	桃	新暦では4月11日
端午節供(5月5日)	ショウブ・ヨモギ	新暦では6月7日
七夕節供(7月7日)	合歡木・カジ	新暦では8月10日
重陽節供(9月9日)	菊	新暦では10月11日

それぞれの行事内容は歴史過程で変容しているが、ここには、特定の意味づけのもとで花や草木が結びついている。

それは季節感を象徴するものであると同時に、人々の願いや希望を表象するものである。季語となるこれらの花・草木は景物を超え、人の心を含意するといえる。